

現代日本語の受身文における「ニ」と「カラ」の交替 —構文と動詞の吸引力の観点から—

鄭若曦（北京外国語大学）

要旨

本発表では「カラ受身文」と「ニ受身文」が如何なる場合に交替を引き起こすかという問題に関して、動詞と構文の吸引力を統計的に図ることでアプローチを試みた。その結果、典型的に交替が起こる動詞は「感情態度動詞」「行為影響動詞」「言語的働きかけ動詞」の三種類であり、従来交替可能動詞として扱われてきた「譲渡動詞」と「情報伝達動詞」は、実は「ニ受身文」にほとんど現れないことがわかった。また、「追跡動詞」「視線放射動詞」は、「移動」の意味を読み取る余地が十分あるにもかかわらず、「カラ受身文」との相性が悪いことがわかった。

1、問題の所在

現代日本語の受身文において、動作主をマークする形式としては、「ニ」「カラ」「ニヨッテ」などがある。中でも、例(1)(2)の示すような「ニ」と「カラ」の交替可能性の問題は、これまで柴谷(1978)、砂川(1984)、張(1995)、森(1997)をはじめとする多くの研究で取り上げられてきた。

(1)彼はみんなに／から信頼されている。 (砂川 1984:71)

(2)彼女は見知らぬ男に／*から殺された。 (張 1995:131)

先行研究は分析の射程や角度に違いはあるものの、おおむね「ニ格で表される動作主が移動の起点としても解釈できる場合に「ニ」と「カラ」の交替が起こる」という見解で一致している。問題はどのような動詞を述語にとる場合に、両方の解釈が可能かである。この点に関して、先行研究はそれぞれ動詞の列挙または分類を提示しているが、いずれも内省や限られた用例収集に基づくもので、統計的にどのような動詞の場合に典型的に「ニ」と「カラ」の交替が起こるのか、しいては動作主と起点の両方の解釈ができるかは示されていないと言えよう。

本研究では、Stefanowitch & Gries (2003)をはじめとする一連の研究で取り上げられた「コロストラクション分析 (Collostructional Analysis)」という分析方法を用い、動詞と構文の吸引力を統計的に測ることで、ニ受身文とカラ受身文がそれぞれどのような動詞を誘引し、またどのような動詞の場合に典型的に「ニ」と「カラ」の交替が起こるかを特定することを目指す。

2、「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替に関する先行研究

「カラ受身文」と「ニ受身文」が如何なる場合に交替可能かという問題に関して、柴谷(1978)、砂川(1984)、細川(1986)、佐伯(1987)、張(1995)、森(1997)、菅井(2007)、熊井(2018)をはじめ、様々な研究が行われてきた。前述したように、これらの研究はいずれも「ニ格で表される動作主が移動の起点としても解釈できる場合に「ニ」と「カラ」の交替が起こる」という前提のもとで、交替可能と交替不可能な動詞を列挙または分類している。紙幅の都合上、代表的なものとして柴谷(1978)、砂川(1984)、張(1995)を表1に挙げる。

表1 「カラ受身文」「ニ受身文」の交替が可能な動詞

| | |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 柴谷 (1978) | ① <u>具体的移動</u> ：贈る、見せる… ② <u>抽象的移動</u> （愛情/称賛/叱責等）：愛する、かわいがる、ほめる、怒鳴る… |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------|

| | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 砂川 (1984) | <p>動詞の項構造による分類:</p> <p>①A が B に C を V タイプ: 教える、言う、頼む、与える、贈る、預ける…</p> <p>②A が B を D に V タイプ: 招待する、誘う、招く、推薦する、選ぶ…</p> <p>③A が B を V タイプ: 愛する、憎む、好く、嫌う、慕う、尊敬する…</p> <p>④A が B に V タイプ: 泣きつく、食ってかかる、話しかける、詰め寄る…</p> |
| 張 (1995) | <p>動詞の意味特徴による分類:</p> <p>①言語的働きかけ動詞: 叱る、挨拶する…</p> <p>②精神的働きかけ動詞: 無視する、諦める、頼る、見離す、注目する</p> <p>③感情態度動詞: 嫌う、愛する…</p> <p>④知覚思考動詞: 見る、考える…</p> <p>⑤情報の対象移動動詞: 言う、発表する…</p> |

表 1 から分かるように、どのような動詞が「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替を引き起こすかに関して、上記の先行研究は交替可能な動詞の範囲や分類方法に違いがあるものの、共通する問題がある。それは交替可能な動詞の中で、典型的な動詞と非典型的な動詞を区別していないという点である。その結果、交替可能な動詞であれば、どちらの構文にも同じぐらい容易に現れるということになるが、これは事実を反映していないと言えよう。

この点に関して、森 (1997) は明確に交替可能な動詞のうち、1) 具体物の移動を表す動詞 (送るなど); 2) 言語の移動を表す動詞 (言うなど); 3) 心的態度の放射を表す動詞 (憎む)、という三種類の動詞が典型的に「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替を引き起こすと指摘している。ただ、森 (1997) が挙げた上記の三種類の動詞は、主に内省に基づいており、統計的なデータに基づくものではない。あとの分析でもわかるように、上記の三種類の動詞のうち、1) と 2) の一部の動詞は、実は典型的に交替を引き起こす動詞ではなく、「ニ受身文」よりも「カラ受身文」との吸引力が圧倒的に高いのである。

また、上記の問題とも関連して、先行研究は「ニ受身文」が使える場合は「カラ受身文」も使えるはずだという暗黙の前提に立つものが多く、「ニ受身文」よりも「カラ受身文」のほうが好まれるのは如何なる場合かという問題については、下記の 2 点以外ほとんど言及されていない。

①人ではなく機関がマークされるときは、「カラ」のほうが好まれる

(3) 政府から (?) に 調査を依頼された。 (砂川 1984:77)

②「ニ」で動作主をマークするときに、曖昧性が生じる場合は、「カラ」のほうが好まれる

(主に【-ガー-ヲ-ニ】型動詞のヲ格補語が受身文の主語となる場合)

(4) 二月二十八日に 第一回診断結果が医師団から (*) に 発表された当初の時点では…田中元首相の政治的影響力に基本的な変化はないという受け止め方が大勢を占めている。 (張 1995:137)

「発表する」は三つの項をとる【-ガー-ヲ-ニ】型動詞であり、例 (4) のようにヲ格補語 (「第一回診断結果」) が受身文の主語となった場合、「医師団」を「ニ」でマークすると、それが「発表する」という動作を行った行為者なのか、動作の向かう対象なのか曖昧になる。その曖昧性を回避するために、「カラ受身文」が選ばれたというわけである。ただ、張 (1995) でも指摘があったように、【-ガー-ヲ-ニ】型動詞の中でも、所有権の移動を表す動詞 (渡す、与えるなど) は、例 (5) のように、たとえ二格補語が受身文の主語になった場合でも (即ち、曖昧性が生じない場合でも)、「ニ受身文」はほとんど使われないのである。この傾向は、実は所有権の移動を表す動詞だけでなく、多くの【-ガー-ヲ-ニ】型動詞に見られることを本研究の後の考察で確認していきたい。

(5) 黒人兵は時には直接に女たちから (? に) 食物を与えられた。

(張 1995:138)

以上、先行研究の主な内容と問題点を指摘した。以下、「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替の実態をより精確に把握するために、本研究では Stefanowitch と Gries の一連の研究で取り上げられた「コロストラクション分析(Collostructional Analysis)」という分析方法を用い、動詞と構文の吸引度(collostruction strength)を統計的に測ることで、「ニ受身文」と「カラ受身文」がそれぞれどのような動詞を誘引し、またどのような動詞の場合に典型的に「ニ」と「カラ」の交替が起こるかを特定することを目指す。

3、コロストラクション分析：動詞と構文の吸引度の測定

認知言語学では、近年動詞とそれが生起する構文との相互作用に注目が集まっている。中でも、Stefanowitch & Gries (2003) や Gries & Stefanowitsch (2004) をはじめとする「コロストラクション分析 (Collostructional Analysis)」の研究は、統計的な観点からこの問題にアプローチしており、優れた研究モデルを提示している。Taylor (2012) が指摘したように、コロストラクション分析の出発点は構文であり、ここで言う構文とは、(複数の) スロットを含んだ、内的に複雑な統語構造のことである。コロストラクション分析は、構文のあるスロットの位置に生起することのできる項目 (例えば動詞) には典型的にどのようなものがあるかを、その項目と構文との間の誘引の度合い—吸引度 (collostruction strength)—を統計的に測ることで特定しているのである。

例えば、動詞「聞かす」と「カラ受身文」との間の吸引度を知りたい場合、以下の4つの頻度数を数える必要がある：①コーパスにおける「聞かす」の出現頻度；②コーパスにおける動詞の出現頻度；③コーパスにおける「カラ受身文」の出現頻度；④「カラ受身文」における「聞かす」の出現頻度。表2のように、上記の4つの頻度で2×2表を作り、「聞かす」が「カラ受身文」における観測頻度と期待頻度の間に有意差が見られるかどうかをフィッシャー直接確率計算 (Fisher exact test) によって計り、動詞と構文の吸引度を算出するという流れである。

表2 「聞かす」の2×2表

| | 聞かす | ¬ 聞かす | 総数 |
|---------|------|---------|----------|
| カラ受身文 | 18④ | 831 | 849③ |
| ¬ カラ受身文 | 121 | 1534195 | 1534316 |
| 総数 | 139① | 1535026 | 1535165② |

具体的には、まず、コーパスとして、BCCWJ 日本語書き言葉均衡コーパスのうち「図書館サブコーパス (1000万語規模)」を選んだ。次に、検索ツール中納言を利用して、それぞれ「語彙素：聞かす」「品詞：大分類：動詞」で検索することで①と②の頻度数が得られた。③は「品詞：大分類：動詞＋語彙素：れす」で検索したあと、手作業でノイズを取り除くことで得られた。④は③の中から「聞かす」の例をピックアップすることで得られた。最後にこれらの4つの数値を Gries2007 が開発した Coll.analysis.3.2a というプログラムに入力することで、「聞かす」と「カラ受身文」との間の吸引度 36.468 が算出されるのである (この数値が 1.30103 より高い場合は $p < 0.05$ 、即ち動詞が当該構文に表れる確率が有意に高いことを意味する)。

4、動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度分析

4.1 典型的に「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替が起こる動詞

本研究では、「カラ受身文」と「ニ受身文」の用例を、BCCWJ 日本語書き言葉均衡コーパスの「図書館サブコーパス」の中から、中納言による検索と手作業によるノイズ除去によって、最終的にそれぞれ 849 例と 3042 例集めることができた。動詞のタイプという点から見れば、「カラ受身文」と「ニ受身文」はそれぞれ 134 と 706 の動詞があった。この中から、「カラ受身文」と「ニ受身文」との吸引度がともに 1.30103 より高い動詞

をリストアップした結果、主に以下の三種類の動詞にまとめることができた。

①感情態度動詞

【嫌う、好く、信頼する、愛する、感謝する、バカにする、歓迎する、憎む、相手にする、気に入る、慕う、尊敬する、敬遠する、評価する、支持する、疎む、妬む、敬愛する、期待する、称賛する、軽蔑する、誤解する、励ます、ちやほやする、拒否する、拒絶する、忌み嫌う、頼る、笑う、疑う、心配する】

表3 感情態度動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度

| | Kara Freq | Kara Strength | Ni Freq | Ni Strength |
|-------|-----------|---------------|---------|-------------|
| 嫌う | 15 | 24.429 | 27 | 35.552 |
| 好く | 11 | 21.676 | 27 | 48.674 |
| 信頼する | 7 | 11.72 | 9 | 10.964 |
| 愛する | 8 | 8.365 | 41 | 46.393 |
| バカにする | 4 | 6.44 | 7 | 8.759 |
| 歓迎する | 4 | 6.291 | 7 | 8.499 |
| 憎む | 4 | 6.184 | 4 | 4.02 |
| 相手にする | 4 | 5.935 | 6 | 6.439 |
| 気に入る | 5 | 5.843 | 11 | 9.934 |
| 慕う | 3 | 5.124 | 8 | 11.913 |

「カラ受身文」と「ニ受身文」との吸引度がともに 1.30103 より高い動詞の中で、感情態度動詞は最も数が多く、且つ吸引度が比較的に高かった。表3は、その一部（吸引度がともに4より高いもの）をリストアップしたものである。このタイプの動詞は、どの先行研究でも挙げられており、最も「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替が起こりやすいタイプの動詞だと言えよう。

②行為影響動詞

【依頼する、頼む、強制する、指示する、誘う、託する、要求する、促す、招く、導く】

表4 行為影響動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度

| | Kara Freq | Kara Strength | Ni Freq | Ni Strength |
|------|-----------|---------------|---------|-------------|
| 依頼する | 12 | 19.751 | 6 | 5.168 |
| 頼む | 15 | 16.672 | 65 | 75.306 |
| 強制する | 6 | 10.774 | 5 | 6.449 |
| 指示する | 6 | 8.92 | 5 | 4.446 |
| 誘う | 25 | 8.51 | 45 | 49.177 |
| 託する | 4 | 6.26 | 4 | 4.094 |

依頼、命令、勧誘、要求などによって相手の行為に何らかの影響を与える動詞を、ここで仮に「行為影響動詞」と呼ぶ。「カラ受身文」と「ニ受身文」との吸引度がともに 1.30103 より高い動詞の中で、行為影響動詞の数は感情態度動詞ほど多くはないが、一定の割合を占めている。表4は、その一部（吸引度がともに4より高いもの）をリストアップしたものである。先行研究では、「カラ受身文」と「ニ受身文」の交替が可能な動詞を論じる際に、いずれもこれらの動詞を一つのカテゴリーとしてまとめていないが、これらの動詞によく交替が起きることには共通の理由があると思われる。すなわち、これらの動詞は相手の行為に何らかの影響を与えるという点で他動性が高い一方、依頼、命令、勧誘、要求などが多くの場合「言葉」を媒介として行われるため、そこに「移動」を読み取る余地もあり、その結果、動作主と起点のどちらの解釈も優勢にな

ったと考えられる。

③言語的働きかけ動詞

【叱る、叱責する、罵倒する、酷評する、非難する、怒鳴る、批判する、罵る、断る、冷やかす、注意する】

表5 言語的働きかけ動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度

| | Kara Freq | Kara Strength | Ni Freq | Ni Strength |
|------|-----------|---------------|---------|-------------|
| 叱る | 8 | 11.328 | 36 | 52.694 |
| 叱責する | 2 | 4.438 | 3 | 5.37 |
| 罵倒する | 2 | 4.01 | 4 | 6.454 |

このタイプの動詞は、通常「言語」を媒介として、相手に何らかの批判的態度を示すことで相手に働きかけをすることを表す。このような意味特徴により、動作主と起点の両方の解釈が優勢になったのだと言えよう。表5は、その一部（吸引度がともに4より高いもの）をリストアップしたものである。ここで注意してほしいのは、言語的働きかけ動詞は通常人間をヲ格補語としてとる【-ガーヲ】型動詞であるという点である。これからの4.2節のデータから分かるように、同じく「言語」を媒介としながら、人間をニ格補語としてとる【-ガーヲニ】型の動詞は、「言う」「聞かす」などの限られたものを除けば、一般的に「カラ受身文」の方に表れるのが優勢なのである。この点は先行研究ではほとんど言及されておらず、両者とも典型的に交替が可能な動詞として扱われるのが一般である。

4.2 「カラ受身文」の方が優勢な動詞

本研究が集めた「カラ受身文」と「ニ受身文」の用例のうち、「カラ受身文」との吸引度のみが1.30103より高いものをリストアップした結果、主に以下の二種類にまとめることができた。

①譲渡動詞

【送る、贈る、渡す、提出する、供給する、支給する、授与する、提示する、提供する、献上する】

表6 譲渡動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度

| | Kara Freq | Kara Strength | Ni Freq | Ni Strength |
|------|-----------|---------------|---------|-------------|
| 送る | 33 | 41.793 | | |
| 贈る | 14 | 36.468 | | |
| 渡す | 13 | 16.048 | 2 | 1.014 |
| 提出する | 10 | 13.675 | 2 | 0.363 |
| 供給する | 7 | 12.754 | | |
| 支給する | 7 | 10.918 | | |
| 授与する | 4 | 9.549 | | |
| 提示する | 5 | 7.129 | | |
| 提供する | 6 | 6.41 | | |

これらの所有権の譲渡を含意する【-ガーヲニ】型動詞は、曖昧性が生じる場合（ヲ格補語が受身文の主語になる場合）を除けば、先行研究では一般的に交替可能な動詞として扱われ、4.1で挙げた三種類の動詞とは特に区別することなく位置付けられてきた。張（1995）のみ、例（5）のような曖昧性が生じない場合（ニ格補語が受身文の主語になる）でも、「ニ受身文」がほとんど使われないと指摘しているが、このことは本研究のデータでも確認された。表6から分かるように、譲渡動詞と「カラ受身文」の吸引度は極めて高いが、「ニ受身文」では用例が見つかっていないものがほとんどである。また、「カラ受身文」の用例を具体的に見ても、

ヲ格補語が受身文の主語になる場合もちろんあるが、例(6)(7)のように二格補語が受身文の主語になる場合もかなり多く、曖昧性の回避だけが原因で「ニ受身文」が排除されているとは言えないと考えられる。

(6) こうして季長は恩賞として泰盛から馬と馬具一式を贈られた。(北条時宗のすべて)

(7) この年に、最高の作家に送られるプーシキン賞を学士院から授与され、名実共にロシアを代表する作家の一人としての地位を確かなものにした。
(作家と作品でつづるロシア文学史)

②情報伝達動詞

【知らず、質問する、言い渡す、申し渡す、提案する、伝達する、報告する、切り出す、公表する、語る、紹介する、推薦する、(聞かす、言う、指摘する)】

表7 情報伝達動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度

| | Kara Freq | Kara Strength | Ni Freq | Ni Strength |
|------|-----------|---------------|---------|-------------|
| 知らず | 6 | 10.602 | 2 | 1.301 |
| 質問する | 6 | 8.623 | | |
| 言い渡す | 4 | 8.426 | | |
| 申し渡す | 3 | 6.589 | | |

前述したように、これらの情報伝達を表す【-ガーヲ-ニ】型動詞は、例(4)のように曖昧性が生じる場合を除けば、一般的に交替可能な動詞として扱われ、「叱る」をはじめとする言語的働きかけ動詞とは特に区別することなく位置付けられてきた。しかし、本研究の調査から、「聞かす」「言う」「指摘する」を除けば、他の【-ガーヲ-ニ】型情報伝達動詞は「カラ受身文」との吸引度は極めて高いが、対応する「ニ受身文」の用例は見つかっていないものが多く、見つかったとしても吸引度が低いことが分かった。また具体的な用例を見ても、例(4)のような場合以外にも、例(8)(9)のように二格補語が受身文の主語になる場合がかなり多く、曖昧性の回避だけが原因で「ニ受身文」が排除されているとは言えないと考えられる。

(8) 当時、七十七歳ながら矍鑠として住職を務めていた龍憲の祖父・仰善は、頼子から息子の死を知らされ、ショックでそのまま寝込んでしまった。
(憲法を獲得する人びと)

(9) しかし、どこでも門前払いを食らった末に、ついに東京の有名美容整形外科医から、恐るべき最後通告を言い渡されてしまったのです。
(スイッチ)

4.3 「ニ受身文」の方が優勢な動詞

先行研究では、「カラ受身文」よりも「ニ受身文」のほうが好まれる動詞として、主に「殺す」「驚かす」をはじめとする状態変化の含意性が高い動詞と、「噛む」「掴む」をはじめとする身体接触を伴う物理的働きかけを表す動詞が挙げられている。本研究の調査では、それ以外にも「ニ受身文」のほうが優勢な動詞が多く見つかったが、中でも「追う」「尾行する」をはじめとする追跡タイプの動詞と、「目撃する」「発見する」をはじめとする視線放射タイプの動詞が注目に値する。追跡は物理的な移動を伴い、視線の放射も感情態度の放射のように一種の移動として捉える余地が十分にあるにもかかわらず、「カラ受身文」との相性が悪いからである。このことから、一口に「移動」とは言っても、何でもありではなく、二人の間での物・情報・感情態度の「授受」を含意する動詞でないと、「カラ受身文」との相性が悪いと言えるのかもしれない。

表8 追跡動詞・視線放射動詞と「カラ受身文」「ニ受身文」の吸引度

| | Kara Freq | Kara Strength | Ni Freq | Ni Strength |
|------|-----------|---------------|---------|-------------|
| 追う | 1 | 1.164 | 23 | 18.984 |
| 尾行する | | | 5 | 7.011 |

| | | | | |
|------|--|--|---|-------|
| 目撃する | | | 6 | 6.919 |
| 発見する | | | 7 | 1.406 |

5、まとめと今後の課題

本研究では、「カラ受身文」と「ニ受身文」が如何なる動詞の場合に交替を引き起こすかという問題に関して、動詞と構文の吸引度を統計的に図ることで、以下の結果（図1）が得られた。今後はこれらのデータに基づいて、動詞の意味を切り口に両構文の意味分析を行っていききたい。



図1 「カラ受身文」と「ニ受身文」の分布図

主要参考文献

- 熊井浩子（2018）「カラ受身文の用法に関する一考察」『静岡大学国際交流センター紀要』12：1-22.
- 佐伯哲夫（1987）「受動態動作主マーカー考（上）（下）」『日本語学』6（1-2）：100-106, 97-105.
- 柴谷正良（1978）『日本語の分析』大修館書店.
- 菅井三実（2007）「格助詞『に』の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17：113-135.
- 砂川有里子（1984）『「ニ」と「カラ」の使い分けと動詞の意味構造について』『日本語・日本文化』12：71-86.
- 張麟声（1995）「ニとカラとニヨッテ受身文における動作主マーカー」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版.
- 細川由紀子（1986）「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」『国語学』144：1-12.
- 森雄一（1997）「受動文の動作主マーカーとして用いられるカラについて」『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』30：83-99.
- Gries, S. Th. & A. Stefanowitsch (2004) Extending collocation analysis: A corpus-based perspective on “alternations”. *International Journal of Corpus Linguistics* 9(1): 97-129.
- Stefanowitsch, A. & S. Th. Gries (2003) Collocations: Investigating the interaction of words and constructions. *International Journal of Corpus Linguistics*, 8: 209-243.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford University Press. [ジョン・R・テイラー『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるか』西村義樹他訳，くろしお出版，2017年]